

# ひかりのこ

2月園便り

聖ミカエル幼稚園  
2015年1月23日

先日の20日に聖ミカエル幼稚園の始業式があり、いよいよ3学期が始まりました。始業式で私は、次のようなお話をしました。「皆さん、3学期幼稚園に登園する日にちはたった39日です。この3学期が終わったら、すすらんさんは小学校1年生に、ひまわりさんはすすらんさんに、こすもすさんはひまわりさんになります。そしてまた、ちいさなこすもすさんがミカエル幼稚園に入ります。だからこの3学期は、みなさんが一つ上の学年に上がる準備の時間です。みなさんが立派に大きくなってくれることを、園長先生は願っています。それからすすらんさん、園長先生が皆さんに小学校に一番持って行ってほしいものは『優しい心』です。みなさんが『優しい心』を小学校にもって行ってくれることを、心から願っていますよ。」

さて、3学期が始まる前日、私たち職員は『温故知新（古きをたずねて新しきを知る）～聖ミカエル幼稚園の伝統を学ぼう～』というテーマで研修会を行いました。講師は、聖ミカエル教会の信徒さんで婦人会長の鈴木洋子（ひろこ）さんをお願いいたしました。鈴木さんは私の幼稚園の担任の先生でもあり、50年ほど前の聖ミカエル幼稚園を知っている方です。当時の吉井園長先生の厳しくも、筋の通った保育方針のこと、「子ども達はお客様なので失礼のないように、先生方はチャラチャラした格好をしてはいけません、エプロンも子ども達を汚いもののように扱うことなので、してはいけません。」とおっしゃっていたこと、園庭に遊具はすべり台とジャングルジムと4人乗りのブランコしかなかったけど、みんな楽しそうに遊んでいたこと、日曜日に幼稚園があり、礼拝をして帰り、そのかわり月曜日がお休みだったこと。子ども達に大人気だった紙芝居が『タイタニック号は沈まない』という、とても大人っぽいお話であったこと、などをお話しされました。

当時の写真も見せていただき、有意義な1時間半でした。私は当時園児でしたが、あまり細かい記憶がありません。でも、先生方がとても気品があり、私たち子どもを厳しくも大切に扱ってくださったことは、何となく覚えています。見せていただいた洋子先生の写真には、幼稚園児の私や、兄や妹が写っていて、私たちはこうやって先生方に守られていたのだな、と感じました。

当時と今とでは、時代背景も違いますし、社会の幼稚園に対するニーズも違います。しかし、今も昔も先生たちの「子どもを大切にする。」気持ちには変わっていない、と自信を持って言えます。

次の日の始業式の礼拝は、下澤先生による「イエスの命名」のお話でした。下澤先生が、「皆さんにもイエス様と同じように一人ひとりにお名前がありますね。それは、一人ひとりが神様にとって、そしてお父さん

やお母さんにとって大切な宝物である、ということなのですよ。」とお話しされました。私は礼拝堂の一番後ろで子ども達のかわいらしい後頭部を眺めながらそのお話を聞いていました。ふと、先生方を見ますと、どの先生も、ニコニコしてじっと子ども達を愛おしそうに見つめています。ああ、この雰囲気。この温かな先生方の優しさこそが、聖ミカエル幼稚園の伝統なのではないか、と感じました。

園長 渡部良子

## 月主題：気づきあう

- ・冬の生活習慣を身につける
- ・友だちと協力し、アイデアを出し合い、工夫して遊びを充実させる
- ・お互いの違いを認めつつ、助け合える喜びを感じる

## キリスト教保育

### 「信じるとは」

私の好きな聖書の箇所、イエスが4人の漁師を弟子にする場面があります。ある日、網を洗っていた漁師たちのもとに、ふらっとイエスが現れます。そして、「あなたがたを人間を捕る漁師にしよう」と意味深長なことを言うのです。迷いも不安もあつたらうに、彼らはその場で仕事も家族も捨ててイエスと旅立ちます。

この物語に関しては弟子たちの覚悟を讃える感想をよく聞きます。しかし、私は読めば読むほど腑に落ちませんでした。なぜかといえば、残された家族のことを思うからです。

私は子どもの頃、何度も父親に出て行かれたことがあって、残された者の涙を知っています。理不尽な別れほど、人に、特に子どもにダメージを与えるものではありません。大黒柱を失い、生活のあても失う現実の前で、ただ途方に暮れるしかないのです。聖書の物語にはその部分が書かれていませんが、必ず残された者の涙があったに違いないのです。しかも、その原因を作ったのは他ならぬイエス様であることを思うと何ともやりきれません。なぜイエス様はそんなことをし、彼らは出かけて行ったのか。考えられる答えは、この別れの悲しみを吹き飛ばすような、途方もなく大きな喜びの約束、疑いのないような形で示された希望がそこにあったからです。私はこのお話しをお葬式ですることがあります。愛する人との別れを余儀なくされたご遺族。なぜ神はこのタイミング、この仕方であつたのか。でも、そこに答えが見つからないからこそ、私達には信じる必要があります。それでもなお、喜び、希望があるはずだと。信じるとは、確証があつたり、身近に御利益があるからではありません。悲しみや苦痛の中にも、意味と希望を見いだすためです。そういうことができるのが、人間に必要な強さなのではないでしょうか。

チャプレン 司祭 下澤 昌